

氏名	趙 南弼
学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第4181号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	動詞句における他動詞と自動詞セル・サセル形の意味差についての研究
学位論文審査委員	主査・教授 江口 泰生 教授 辻 星児 教授 宮崎 和人 准教授 京 健治 岡山大学名誉教授 下河部 行輝

## 学位論文内容の要旨

趙南弼氏の学位請求論文は、公刊論文3本と口頭発表2本を中心にまとめられた、40\*42\*158(原稿用紙で660枚)におよぶ大部な論文である。

序論、本論、結論の三部仕立てで本論は5章からなる。

序論

本論

- 第1章 動詞分類と自動詞(サ)セル形
- 第2章 自動詞(サ)セル形の意味用法
- 第3章 有対他動詞と有対自動詞(サ)セル形の意味差
- 第4章 動詞慣用句の固定度とテストフレーム
- 第5章 動詞慣用句における他動詞と自動詞(サ)セル形の相違

結論

参考文献

日本語他動詞と自動詞のセル・サセル形が両立するかどうかという問題がある。以下の例で「ビルが建つ」の場合、「\*ビルを建たせる」は変であるが、「視線が交わる」の場合、「視線を交わらせる」は可である。この差異がなぜ生ずるのか、というのが本論文の第一の問題点である。

自動詞 : 「ビルが建つ」  
自動詞(サ)セル形 : 「\*ビルを建たせる」  
他動詞 : 「ビルを建てる」  
他動詞(サ)セル形 : 「ビルを建てさせる」

自動詞 : 「視線が交わる」  
自動詞(サ)セル形 : 「視線を交わらせる」  
他動詞 : 「視線を交える」  
他動詞(サ)セル形 : 「視線を交えさせる」

次に並存する「視線を交わらせる」と「視線を交えさせる」が意味的にどのように違うのかという問題の究明が必要となる。

さらに、並存の可否、並存する場合の意味差という二つの問題が、慣用句においても成り立つかどうか。これら3点の問題を扱ったのが本論文である。

第1章では、基本的な動詞を対象に動詞の分類を示した。

第2章では、資料から自動詞+(サ)セル形の実例を調べて、従来に指摘がなかった自動詞(サ)セル形の意味用法を示した。たとえば、「障害者を歩かせる」のような「援助」用法、「枝が葉を茂らせる」のような「単なる状態」用法、「顔を曇らせる」のような「体験」用法、「唇を震わせる」のような「自己発動」用法、を指摘した。

第3章では、本論文の対象となる「視線が交わる、視線を交わらせる、視線を交える」のような表現を分析し、その結果、対象になる名詞の本性や動詞に対する名詞の実現能力が意味に深くかかわっていることを明らかにした。具体的には、「彼は視線を交わらせる」のような「体験」用法、「血液を固まらせる」のような本性や実現能力の「状態変化の惹起」用法、「国を滅びさせる」のような助詞ヲの名詞成分の「損壊」用法をのべた。

有対他動詞と有対自動詞(サ)セル形が並存する場合、有対他動詞は、「事態の達成」が中心であった。たとえば、「視線を交えた」は、「実際に視線を交えた」という結果の意味に中心がある。一方、有対自動詞(サ)セル形の意味は、「事態への仕向け」が中心であった。たとえば、「視線を交わらせた」は、「視線を交えるように仕向けた」という意味に中心があると言える。

以上が動詞句一般にいえることであるのに対し、4章以下は「聞き耳が立てる」のような動詞慣用句を対象に分析を加えた。

第4章では、まず動詞慣用句の構文的・意味的な固定の度合いを明らかにした。新しい構文操作のテストを提示した。動詞慣用句の認定、動詞慣用句の分類、動詞慣用句の段階付け、動詞慣用句の固定度の分析の基準になると結論づけた。

第5章では、動詞慣用句の有対自動詞(サ)セル形が成り立つ条件を明らかにした。その結果、動詞慣用句における自動詞(サ)セル形の意味機能は、「事態にかかわる介入性と変化をうける体験」と結論づけた。

## 学位論文審査結果の要旨

審査会は平成22年2月5日(金)6時より、文学部会議室にて、主査江口泰生、近代日本語を専門とする京健治、現代日本語文法の宮崎和人、言語学の辻星児、そして趙南弼氏の修士課程までの指導教員で本学名誉教授下河部行輝を招聘し、合計5名で審査を行った。

まず申請者から論文の要旨、予備論文からの進展状況について報告がなされた。次に各審査委員から質疑応答が行われた。

まず膨大な労力を費やして用例を探索し、自分なりの問題点を発見し、それを解決しようとする努力は高く評価された。

また本論文が指摘したサセル形の意味に「障害者を歩かせる」「障害犬を走らせる」のような「援助」の意味があるのではないかという指摘は非常に興味深いと評価された。

先行研究において、意味のブロッキングという解釈が提示されてきたが、必ずしもブロッキングが生じておらず、他動詞 vs 自動詞のセル(サセル)形が併存し、意味の使い分けが行われているという指摘、その条件の解明は研究を前進させたものとして高く評価できる。

一方、厳正を期するために、用例を几帳面に検索して収集したために、逆に非常に文学的な表現までも収集し、これが論旨の基軸に影響を齎したのではないかという指摘もあった。本人の際立つ日本語能力からすれば、もっとその能力を生かして、用例を選別しても良いくらいであった。論旨の流れや分析の意図がわかりにくいといった論旨の難渋面も指摘されたが、一つ一つ丹念に積み上げていこ

うとする姿勢がやや空回りした部分があり、今後、研究の道を歩むにあたっては論旨を明快に伝える工夫をする必要があることも今後の課題として示唆された。

審査会を経て、本論文には努力や労力、問題を解決しようとする強い意志・真摯な姿勢が論文全体を通じて力強く伝わってくるのが認められ、先行研究を乗り越える相応の結論や新たな提示も導き出しており、本論文は博士（文学）の学位論文として十分に評価に値するものであることが確認された。

以上の審査の結果、博士（文学）の学位を認定することについて全員一致で合意した。